

フィリピン国政選挙見学ノート

床呂 郁哉 (AA 研所員)

筆者は本年 (2004 年) の 2 月と 5 月の二度にわたり、フィリピンを訪問し、当地で 6 年ぶりに実施された上は大統領・副大統領から国会議員を経て下は町・村会議員にまで至る一大国政選挙の様子を見学することが出来た (投票日は 5 月 10 日)。今回はその様子のことを記してみたい。

まず 2 月に訪問した時点だが、既にフィリピンはすっかり選挙モードだった。焦点の大統領選挙では現職のアロヨ大統領、野党の有力候補として俳優出身のフェルディナンド・ポー Jr. 候補 (以下、ポー候補と略)、元警察長官のラクソン候補、キリスト教「テレビ伝道師」として有名なヴィラヌエバ候補などが有力な候補者として名が挙がっていた。

2 月後半時点ではこのうち野党最有力候補とされていたポー候補が実際には米国籍であるという疑惑が指摘され大統領選に失格になるかどうかを係争中であり、係争と絡んだ政治的不安定化を懸念して連日ペソは対ドルで安値を更新するという状況が続いた。

その後、ポー候補は晴れて「フィリピン国籍」であると判決が出され国籍問題は落着するが、これは今思えばその後の混乱を予兆するかのような出だしであった。その後の世論調査ではポー候補が一時、現職のアロヨ大統領を上回る支持率を記録するが、その後、アロヨ候補も必死の追い上げを見せ、現職の強みを生かして地方予算等の増額等の見返りをちらつかせながら選挙運動を展開した。こうした作戦が効を奏したのかアロヨ候補の支持率も上昇し、筆者が 5 月 5 日に再び訪比した時点ではアロヨ候補優位と伝えられていた。もちろんポー候補なども挽回のために奮闘した。

投票前日の 5 月 9 日にはマニラのビジネスの中心であるマカティ地区で大規模なポー候補陣営の集会が開かれた。筆者もその現場に参加して見学することが出来たが、俳優出身であるポー候補の人脈を生かして、フィリピン映画界の若手人気俳優であるリチャード・ゴメスが集会の総合司会を務め、他にもエディー・ガルシアなどの映画スターや有名人が多数動員されていた。内容も歌あり踊りありで、選挙の集会というよりは大きなフィエスタ (お祭り) のような雰囲気、多数の観衆を集めていた。ちなみにこうした陽気な祝祭的雰囲気は大なり小なり他の陣営の集会などにもあり、フィリピンの選挙ではお約束のようなものでもある。

さて翌 5 月 10 日はいよいよ投票で、混乱もなく即日開票されて当選者が決定した、と言いたいところだが、実際にはフィリピン各地で選挙に関連した暴力事件や役所のミスで有権者が名簿に登録されておらず投票ができなかった事件等の混乱が相次いだ。開票と集計作業も遅れに遅れて、この原稿を書いている 5 月 19 日時点でも、公式の選挙管理組織コムレックはもちろん、民間の集計団体ナムフレルでも、まだ大統領・副大統領や上院議員など主要なポストの当選確定は出ていない。

中間集計では与党アロヨ候補陣営が優位とされているが、ポー候補ら野党陣営は与党側による大規模な不正があったと激しく非難しており、まだしばらくは選挙の結果を巡っての混乱が尾を引きそうな雲行きである。マルコス独裁政権が崩壊して 20 年近くだが、民主化の道はまだ課題含みであることを垣間見せた選挙であった。

